

左右田寛治さんの連載は今回をもって最終回となります

この連載で自分の末期癌について公表して以来、読者の皆様から多くのお便りを頂戴している。

大半は鄭重なお見舞いであり、早晚終了する当連載を惜しんでくださる声である。私はこれらの手紙に、大いに慰めを得ています。

何よりも、私の過去の作品を褒めてくれているのが嬉しい。中にはこちらが面映ゆくなる大激賞もある。読んでいるうちに、なんだか私の死が大きな社会的損失に思えてくるほどだ。差出人の方々は、できれば私が元氣なうちに、こういったお手紙をプロデューサーやスポンサーに送っていただけると有り難かった。

というのは冗談にしても、もう機会も限られていると思うので、これから頂戴するお便りの分もふくめて、この稿を借りて御礼申し上げておきます。

しかし、瀕死の病人といえども万人の同情を勝ち得ることはできないらしい。中には「せいせいした」「早く死んでしまえ」というお便りもある。見知らぬ他人にそこまで憎まれる覚えもないのだが、そんなに私の書いたものが気に入らなかつたのか。あるいは、自分より不幸な人間を見つけて石を投げることで、日頃の鬱憤を晴らしておられるのか。

私はこれらの罵詈雑言も、それはそれで楽しく拝読している。強がりじゃありませんよ。本当のことです。脚本を書いている時も、私は評判が悪い時のほうがかえって発憤するタイプであった。すべての人から優しくいたわられるより、一定数こういう意見があつた方が、私の寿命はかえって延びるようだ。期待を裏切つてすみません。

もつとも、こんな手紙をせっせと病床に運んでくる編集者は、どうかと思うよ。ねえ、井上君。あるいは君も、これらの手紙と密かに同心なのではないかと僕は疑っている。そうじゃないというのなら、ウイスキーの一本も差し入れなさい。こっちはもう、休肝日など知つたことではないのだ。

そうかと思うと、宗教の勧誘も多い。

私はそちら方面の関心はゼロに等しい。神も仏も信じない。戒名も墓も要らない。そんな罰当たりなことを方々で言い過ぎたせいだろうか。先日とどいた手紙には「いま改心すれば間に合います」「このままでは地獄に落ちます」と書いてあつた。同封の画用紙を広げてみると、これが自作の地獄絵図だ。じつに微笑ましい絶妙な下手くそ加減で、針山とか、血の池地獄とか、昔話の挿絵に出てくるような幼年向けの地獄の世界が描かれている。私はすっかり気に入ってしまった、病室の壁に貼っておいたら主治医に叱られた。

評論家諸氏いわく、無内容、品性下劣、不敬不遜、子供に悪影響、等々々。ろくでもない創作に終始した人生であつたことは否定しない。閻魔様がお前なんか地獄行きだというのなら、私は素直にしたがうつもりでいる。願わくば、この絵のような場所であつてくれたら楽しそうでよいのに。

それにしても、差出人の方々は、どうして私など入信させようとするのだろうか。妻も子もなければ金もない。「左右田寛治」などという三文脚本家の名に、広告塔の価値があるとも思えない。おかげさまで友人は多いが、もうじき死んでしまう身としては、彼らを勧

誘することもかなわない。

いくら考えても、彼らには何の得もない。にもかかわらずこんなに熱心に誘ってくれるのだから、その動機は、彼らなりの善意にあると解釈するよりなさそうだ。

つまり、よかれと思って誘ってくれているのである。よかれと思って、「地獄に落ちるぞ」と書いてよこす。よかれと思って、地獄絵図を送りつける。そういう善意が、現に存在するのである。

一方で、「死んじまえ」という罵声が私を勇気づけてくれるという事実もある。人の善意や悪意など、しょせんは受け手の主観次第だということか。

そういう視点から自分の人生を振り返ってみて、私は考え込んでしまった。私の四十五年の生涯は、誰から感謝され、誰から恨まれていたのだろうか。よかれと思ってかけた一言が、相手にとっては「地獄に落ちろ」と聞こえていた可能性もあるし、その逆もあり得たわけだ。

これは本当に、閻魔様に精算してもらわなくちゃなりませんよ。人生の終わりに、ぜひとも答え合わせをしたいものだ。八勝七敗ぎりぎり勝ち越す自信はあります。別れたカミさんが審判に加わっていなければ。

自分の死がスケジュール帳に組み込まれてみると、「死後の名誉」ということが頭に思い浮かんだ。

戦に負けた軍隊は、降伏前に不都合な書類をすべて焼き捨てる。私も、年老いた父と子持の妹を相手に、遺品整理で思わぬ恥をかきたくない。そこで先日、主治医の先生に頼みこんで、一日外泊の許可をもらった。体の動く今のうちに自宅へ戻り、機密書類を処分しなければ。

もっとも、私は家の中が散らかるのが嫌いで、あまり物をとっておかない。本や資料なども、用がすめばすぐに廃棄してしまう。一人住まいの1LDKは、手を叩けば訝がcaeるほどガラランとしている。気張って帰ってきたわりには、捨てるほどの荷物もないのであった。

それでも押入れの一角には、引越して以来いちども開いていない段ボールが二つほどあった。そうとう古い段ボールで、たしか私が高校生の時、一家が東京へ引越してきた時の荷造りだ。何を入れたか、自分でも覚えていない。びっくり箱でも開けるような心持ちで、私は箱の蓋を開けた。

入っていたのは、子供の頃のガラクタだった。小学校の図工で作った彫刻とか、家族旅行で母が買ってくれた竹細工の蛇とか、そういった類いの物だ。大事にとっておいたわけではなく、捨てそびれてしまった物なので、特に愛着はないが、見ているうちに甦ってくる思い出はある。

たとえば、スポーツカーの模型。ホルシエの何とかという型のやつだ。小学三年生の時、持ち主だった友達が、私にこれを貸してくれたまま突然どこかへ引越してしまい、手元に残ったものである。野上君という親友だった。大晦日までいっしょに遊んでいたのに、冬休みが明けたら転校していたので呆気にとられた記憶がある。引越すなら引越すと、どうして言ってくれなかったのか、私はひじょうに寂しい気持ちになった。自分が思っていたほど、私は彼にとって大事な友達ではなかったのか。あるいは大事な友達すぎて、別

れを言いそびれてしまったのか。模型は、はじめから形見としてくれるつもりだったのかもしれない。

箱の中には、野球の軟式ボールもあった。

これを見た瞬間、私は思わず息を飲んだ。直径七センチほどの白い球体。私はこのボールのことを、すっかり忘れていた。おそらく、努力して忘れたのだ。

それほどこのボールには、辛くて息苦しい少年期の思い出がまつまっているのである。

私は少年時代、水泳では県大会に出るほどの名選手だったが、そのかわり陸のスポーツはからきしであった。とくに球技は全滅で、バレーボールから卓球まで、球の形をしている物で私が思うように操れた物は何ひとつない。バスケットボールのドリブルなど、あんな大きな球をつきながら、どうして自分の思った方向へ走ったり、急に止まったりできるのだろうか。あれだけはいまでも不思議でしかたがない。

私は苦手なことはやりたがらないタイプだから、草野球はもとより、路地裏の三角ベースですら見学専門だった。したがってこの軟式ボールも自分で買った物ではない。人からの貰い物である。

私は幼い頃、近所の子供五、六人とグループを作って遊んでいた。その中に、ダイちゃんというガキ大将がいた。私はグループの中では最年少、ダイちゃんは私より三つ年上の最年長だった。

ダイちゃんは野球少年で、日課のように公園で素振りをしたり、日曜日にはお父さんとキャッチボールをしていた。このダイちゃんのお父さんという人が、突然私にこの軟式ボールをくれたのである。

私の通っていた小学校の裏手に、地元信用金庫の女子寮があった。寮の塀は見上げるほど高く、子供たちはよく横一列になって、この塀にボールをあてて遊んでいた。私はこの遊びにも加わることを拒んでいたのだが、どうやらその姿が、ボールを持っていないために輪に加われない哀れな子に見えたらしい。つまりダイちゃんのお父さんは、「善意」からこのボールをプレゼントしてくれたのだ。

おかげで私は、このボール投げに参加せざるを得なくなった。そうしないと、ダイちゃんのお父さんが気を悪くすると思ったのだ。思えば私はこんなに幼い頃から、人の顔色ばかりうかがっていたのだなあ。

はじめて触る軟式ボールは、月のクレイターのような穴ぼこが表面に付いていて、私の幼い手にあまるほど大きかった。投げ方はダイちゃんが教えてくれたが、そこは私のこと、いくらその通りに投げてても、決してその通りには投げられない。当時は力も弱かった。道路の反対側から、灰色の塀をめぐって力いっぱいボールを投げる。一度で塀まではとどかない。途中、アスファルトの路面にワンバウンド。塀にあたってはねかえり、またワンバウンド、ツーバウンド。私の手元に戻るころには、ボールはころころと路面を転がっている。それを私は、見事にトンネルするのである。

うしろには、古い商店の建物があった。何のお店だったのかは知らないが、もう店じまいをして久しく、長年シャッターが降りたままだった。

私を取り損なったボールが、このシャッターに当たるとガッシャンと耳障りな音をたてる。一緒にボール投げをしていた仲間たちが、私を睨む。ダイちゃんまで、またお前か

という顔で私を睨む。こんなボール投げ、こっちはやりたくてやってるわけじゃない。お前さんの親父の顔をたてているんだよと腹が立ったが、それでやめるわけにもいかないから、また投げる。また取り損なう。ガツシャーン。この連続だ。

もちろん、私以外の子がエラーをしても、シャッターは鳴る。それがあんまり続くと、とうとう二階の窓が開いて、「うるさいねっ」とおばあさんに怒鳴られる。

このおばあさんは「ネコババア」の異名を持つ、子供たちの天敵だった。

話がだらだと、とりとめもなくなっている。

井上君にそのことを話すと、「枚数なんか、どうでもいいです。気の済むように書いて下さい。掲載の方法はいかようにも考えます」と言ってくれた。「どうせ最後の原稿でしょうから」とは言わなかったが、まあ、そういう意味でしょう。

お言葉に甘えて、好きに書かせていただくこととする。どこへ向かって、何を書こうとしているのか、今のところ私自身にもわからないが、とにかく思い出話を続ける。

ネコババアは、でっぷりと太った、人相のあまりよくない人で、我々はおばあさんだと思っていたが、よく考えればまだ五十代くらいだったかもしれない。外を歩く時は必ず猫を抱いているからネコババアなのだが、子供が嫌いらしく、私たちは町で遭遇するたびに、いつもガミガミ小言を言われた。公園で遊んでいると、帰って勉強しろと怒鳴られる。道を歩いているだけで、もっと歩道によれと怒鳴られる。私たちは彼女の姿を見ただけで逃げ出したものだが、子供のことだから、それ自体も一種の遊びのようなものであった。子供たちは恐れるふうを装いながら、内心ではネコババアのことを馬鹿にして嘲っていた。そうでなければ、ネコババアの家の前でボール遊びなどしない。

シャッターの音に怒ったネコババアは、怒鳴ると同時に洗面器の水をまく。子供たちは蜘蛛の子を散らすように逃げる。そしてほとぼりの冷めたころにまた集まって、ボール投げを始めるのである。いたちごっこであった。

時には逃げ遅れて、頭から水をかぶる者もいた。こういうスリルは、子供たちの大好物だ。そのうちボール投げの趣旨が変わり、わざとシャッターを鳴らしてネコババアを怒らせ、頭に水をかぶってしまった者が負け、などというひどいゲームが發明された。

私はある理由があつて、一度も水をかけられたことがなかったが、ある時ダイちゃんもともに頭から水をかぶってしまった。そのままうちに帰ったダイちゃんは、お父さんにこっぴどく叱られた。翌日会った時には、額におおきな瘤ができていた。

ネコババアは、ダイちゃんが住んでいるアパートの大家だったのだ。ダイちゃんはお父さんに、耳をひっぱられるようにネコババアの家まで連行され、土下座をして詫びさせられたという。土下座はいくらなんでもやりすぎだと思ふのだが、それほどダイちゃんのお父さんは、ネコババアの怒りを恐れた。格安家賃のアパートだったから、万一追い出されでもしたら、同じ条件でよそに住まいを見つけることは不可能なのだ。

この一件以来、ダイちゃんは私たちと遊ぶことを禁じられてしまった。そして今まで以上に野球の練習に打ち込むようになった。

その後このボール投げは、「塀にひびが入る」という女子寮の管理人の苦情により、学校経由のお達しで全面的に禁止されてしまった。私が胸をなで下ろしたことは、言うまでもない。

ネコババアにも本名はある。それを知っている子供は誰もいなかったが、私は知っていた。下の名前は忘れてしまったが、たしか西方さんという苗字だったはずだ。

私はどうしてそれを知っていたかという点、ネコババアが毎週、私の家に来ていたからである。

私の父は開業医だったが、人間の医者をはじめ前回は獣医をしていた。当時も、近所の人に頼まれれば犬猫の診察治療をやっていた。ネコババアは週に一回、猫を診せにきていたのである。つまり私はネコババアにとって、愛猫の主治医先生のご令息ということになる。だから私には水をかけなかったし、道端で子供たちを怒鳴りつける時も、その中に混ざる私にだけは、どこか手心を加えているように感じられた。

ネコババアの飼う猫は「ヒロ」という名前だった。当時すでに高齢だったうえ、脊椎に損傷があつて自力で歩けなかった。不憫に思つて餌をあたえすぎるためか、ぶくぶく太つて体は巨大だったが、そのくせひじょうに臆病な猫だった。

私はいちど、ヒロの悲惨な瞬間を目撃したことがある。妹と商店街を歩いていると、お総菜屋さんの店先の縁台で、おかみさんとネコババアが夕涼みをしていた。ヒロは縁台の端に寝かされており、ネコババアはヒロに背をむけて、おかみさんとおしゃべりをしていく。

そこへ二匹のネズミが、するすると縁台の足を上っていった。そしてヒロの鼻先で、威嚇行動を取り始めた。ヒロは歯を剥いて応戦したが、その実、怯えきつているのがはっきり分かった。ネズミはヒロの顔に噛みついた。ヒロは悲鳴をあげ、縁台の下に転がり落ちた。

猫がネズミに襲われるなどということがあるのか。私は呆氣にとられてしまった。動物の世界では、個の強弱がすべてなのだ。弱みを見せたらもう最後、生きてはいけないのである。こんな市井の片隅にも野生の掟が厳存しているという事実には、私は子供ながらに慄然とした。

この時のネコババアの絶叫は、今でも忘れられない。いつもはむすつと仏頂面のネコババアが、この時は若い娘のような透き通った悲鳴をあげた。ネコババアはヒロを抱きかかえると、私の父のところへ一目散に走って行った。

私と妹が買い物をすませて家に帰ると、ヒロを大事そうに抱えたネコババアが、父に何度も礼を言っているところだった。幸い、ヒロの怪我はたいしたことがなかった。

「でも、あの猫もおじいちゃんだからなあ」ネコババアが帰ったあとで、父がぼつりつぶやいた。「ヒロに何かあったら、西方さんはかわいそうだなあ」

ネコババアには家族がない。駐車場とアパートをいくつか持っていて、食べていくには困らないらしいが、とりたてて趣味や生きがいがあるわけでもなく、猫の世話だけが生活の全てという人なのであった。

それから後も、ネコババアと子供たちのいがみ合いは続いた。

ネコババアはとにかく、私たちが楽しく遊んでいること自体が気に入らないらしい。町で姿を見かけさえすれば、しわがれ声でガミガミ怒鳴りつける。一方、我々の対抗措置は限られていた。シャッターを鳴らすいやがらせは、女子寮の管理人に封じられてしまった。石を投げてガラスを割ってやろうか、物陰に隠れてうどん粉を顔にかけてやろうか、など

というアイデアも出たが、さすがにネコババアに対して直接手を出す勇気のある者はいない。

手をこまぬいているうちに、ネコババアは「親に言いつける」という新手を繰り出してきた。おそらく、ダイちゃんの土下座がヒントになったのである。私たちがすこし道路で騒いでいただけなのに、親の所へねじこんで、まるで重大な交通妨害を犯したかのよう針小棒大に告げ口をする。真に受けた親たちは激怒し、子供らはこっぴどく油を絞られ、ますますネコババアへの復讐を心に誓うのだ。

ところがネコババアは、うちにだけは絶対に文句を言いに来ない。獣医先生のご威光というわけだが、私にはそれが仲間の手前、かえって肩身が狭く感じられてならなかった。私たちは仲間うちで「えこひいき」という言葉をよく使った。ようするに、裏切り者という意味だ。「あいつは先生からひいきされている」という言葉は、「あいつは先生におべっかを使う裏切り者だ」という意味になるのである。

ネコババアが私を特別扱いしていることに、仲間はみんな気づいていた。私は、自分がネコババアからの「ひいき」を快く思っていないということを、証明しなければならなかった。そこで私は、ネコババアではなく、飼った猫のヒロに悪戯をしかける、という報復策を提案した。ヒロがネズミにやつつけられた時の話を、悪意をもってみんなにしゃべった。猫をいじめることで、ネコババアに一矢報いるべしと、暗にけしかけたのだ。そうやって、仲間の歡心を得ようとしたのである。

しかし、ネコババアは外出中決してヒロを懐から放さない。ネズミの一件があつてからは、ますますそうだった。これではヒロに悪戯をしかける隙はない。私の提案は却下された。

私はホッとした。自分で言い出しはしたものの、老齡の、しかも障害をもった猫をいじめるなど、もつての他の所行である。みんながその氣になつたらどうしようと、内心はらはらしていたのだ。幸い提案は容れられず、私は実害ゼロのまま、仲間内忠誠心を証明することができた。これで難局を乗り切れたと、私はおおいに安堵したものだ。

馬鹿だった。

この時のことを思い出すと、今でも激しい自己嫌悪に襲われる。後に起きた大事件は、どう考えても私のこの陰湿な提案に端を発しているのだ。私は先ほどの「八勝七敗で勝ち越し」という発言を取り消すべきかもしれない。

私の住んでいた地域には、いわゆる「子ども会」というものがあつた。学年には関係なく、住んでいる区画ごとに小学生を集めてグループを作り、町の掃除やら、祭りの手伝いやら、課外授業のようなことをさせるのである。

ある時これも会から、近所のお年寄りから地域の昔話を聞いてそれを作文にまとめる、という宿題が出された。訪問先の家も指定されていた。私たちのグループの訪問先は、なんとネコババアの家であつた。

むろん、子供たちに拒否権はない。我々とネコババアとの確執を、大人たちが斟酌してくれるわけもない。我々は仕方なく、あのシャッターのある家に行った。

私の所属する子ども会のメンバーは、そっくり、いつも私が遊んでいる仲間たちだった。その中にはダイちゃんもいた。学年の違う私はひさしぶりにダイちゃんと顔を合わせたの

だが、前に比べて、目つきが暗くて、ちよつと話しかけづらい雰囲気になっていた。

これは、いわば公式訪問である。ネコババアの方でも拒むわけにはいかない。さぞかし迷惑そうな顔でお出迎えだろうと、覚悟をしていた。しかし案に相違して、ネコババアはたいへん友好的に我々を迎え入れてくれた。

天敵ネコババアの住処は、家の広さのわりにはガラんとした印象だった。襖をとっぱらって間続きになった和室には、仏壇を乗せた箆笥がひとつ、テレビが一台、あとは小さなちゃぶ台があるだけだった。

欄間には遺影がいくつかかかっていた。私が鮮明に覚えているのは、仏壇に飾られた写真だ。モノクロの古めかしい、十才くらいの子供の写真だった。

ネコババアは、私たちの人数分の座布団をならべておいてくれた。その時は何も思わなかったが、よく考えてみれば、長年一人暮らしの家に、五枚も座布団があるものだろうか。あれは私たちのために新調した座布団だったのかもしれない。

一番驚いたのは、ちゃぶ台のうえにケーキが置いてあったことだ。私たちの人数分あった。それからモンテイも。我々五人はいずれもあまり裕福ではない家の子だったから、フォークを使ってたべるおやつのおもてなしに、一気に緊張してしまった。臨戦態勢でやってきた我々は、拍子抜けというか、調子が狂うというか、どういう態度をとっていいのか、わからなくなってしまった。

ネコババアは、ちゃぶ台をはさんで私たちの正面にすわった。どんな顔をしていたかは、あんまり覚えていない。たぶん私のほうが、満身に相手の顔を見られなかったのだと思う。しかし内心では嬉しさを感じていたように思う。ネコババアとのいがみ合いでは、わたしはいつも板挟みの心苦しさを味わっていた。これを機に、友達とネコババアが仲良くなってくれば言うことはない。ひよつとしたらネコババアも、そのつもりだったのではないかと思う。

私たちがもじもじしていると、ネコババアの方から昔話をはじめてくれた。この日のために準備していた話であろう。まだこのあたりが田んぼや畑ばかりだった頃の話や、幹線道路が町内を走る前の、のんびりした町の風景。戦争中の話などだった。我々は正座した足をくずさず謹聴し、持参したノートに必死でメモをとった。

話が一区切りついたところで、奥の部屋で電話がなり、ネコババアが席を外した。我々はどっと緊張がほどけ、思い出したようにケーキにかぶりついた。ネコババアも案外いい人じゃないか、という声があがった。私はますます嬉しくなった。

ところが、ダイちゃんだけは別だった。昔話を聞いている間も、ダイちゃんはずっと暗い顔をして、なにやら思い詰めていた。ネコババアがいなくなると、ダイちゃんは不意に立ち上がり、キョロキョロとなにかを探しはじめた。

ヒロを探していたのである。

ヒロは、縁側に置かれた段ボール箱の中にいた。下にやわらかい布団を敷いた、特別におおきな段ボール箱だった。

ダイちゃんはこの日、紙袋を持参していた。私はてっきり、親父さんから持たされたネコババアへの手土産だと思っていたのだが、それにしても中からカサコソと音が聞こえるのが妙だった。

縁側に出たダイちゃんは、その紙袋の中に手を突っ込んだ。取り出したのは土産ではなく、一匹の生きたネズミだった。そしてそれを、ヒロの段ボール箱の中に放り込んだ。

私はしまったと思った。ダイちゃんは仲間の誰かから、私の幻の復讐案を聞いたのに違いない。彼は土下座の件の意趣返し之机をを狙っていたのだ。そしてその手段に、私のアイデアが採用されてしまったのである。

大変な騒ぎになった。ネズミは狂ったように箱の中を逃げ回る。ヒロは完全に恐慌状態に陥った。自由のきかない体でバタバタと暴れ出し、そのうち箱ごと真っ逆さまに、縁側の下に落ちてしまった。

ヒロはひっくりかえった箱の中に、暴れ回るネズミと閉じ込められた。不自由な体で必死に暴れまわる物音と、ネコババアに助けを求める叫び声。その声は人間の声そっくりだった。溺れる幼子が母を呼ぶような、耳を裂く悲痛な絶叫だった。

私たちは恐怖のあまり、その場に凍りついた。張本人のダイちゃんが、一番青ざめた顔をして震えていた。箱をのけてヒロを助けようとする者は誰もいなかった。

ガタンと奥から物音がして、ネコババアが戻ってくる気配がした。我に返った私たちは、いつせいに家を飛び出した。

私たちは、わけのわからない大声を発しながら、やみくもに走った。ネコババアが追ってくるはずもなかったが、もっと恐ろしい何かに追われているような気がして、懸命に駆け続けた。息の続くかぎり駆けに駆け、気がつくと思防ぞいにある隣の公園まで逃げた。

ヒロは無事だったろうか。ネコババアは、私たちの仕事だと気がついただろうか。気がついたに決まっている。あの場から逃げ出してしまったこと自体、自分たちの仕事だと白状したようなものではないか。

ネコババアは、みんなの家に怒鳴り込むであろう。うちの父には告げ口はしないかもしれないが、そのかわり、怪我をしたヒロを診せにくる。ごまかしきれはしない。父は今までいちども私を叱ったことのない人だったが、さすがに今回はそういうわけにもいかないだろう。

いや、叱られるかどうか、などといった小さな問題ではない。ただの悪戯ではすまない、とんでもないことをしてしまったのだということ、子供ながらにわかっていた。胸の中にもくもくとわき上がる罪悪感に、動悸がとまらなかったことを思い出す。みんなが同じ気持ちだった。

私たちは家に帰る勇気が持てず、いつまでも公園でぐずぐずしていた。しかし時間をやりすごしたからといって、何か解決するわけでもない。あきらめて家路についたのは、もうとっぷり日も暮れた頃だった。

大きくて黄色い満月と、足下からのびる長い影。一列になって、土手の上をとぼとぼ歩いて行く子供たち。とりわけ、私の足取りは重かった。みんなと違い、私の家には今頃、ネコババアと傷ついたヒロがいるかもしれないのだ。

家についても、私は門の前を歩きつ戻りつ、中にはいるのを躊躇していた。そのうち、帰りの遅いのを心配した妹が、私を探しに出てきた。そんなところで何をしているのかと驚く妹に、私は中の様子を尋ねた。

妹によると、ネコババアはさっきまでいたが、もう帰ったという。父は私の帰りが遅い

のを心配はしているが、とりたてて怒っている様子はなく、なんだかしょんぼりと元気がない。その落ち込みようがあまりに激しいので、妹はむしろそちらを心配して、私を探しに出かけるところだったという。

私がおそろおそろ玄関をくぐると、父は診察室の奥の部屋にいた。この部屋には患者さんの用の簡易ベッドがあり、近所の犬猫を診てあげる時は、いつもこのベッドが診察台代わりだった。

一步踏み行つて、私は息をのんだ。診察台に、ヒロがいる。おおきな体を横にのばし、開いた口からは舌をのぞかせ、目は半開きだった。呼吸はしていたが、すでに虫の息であることは、一目で分かった。

「縁側から庭に落ちたんだそうだ」父が力のない声で言った。「背骨をやっている。もう助からないので、うちであずかった。かわいそうに……」

かわいそうというのは、ヒロとネコババアの両者にむけた言葉であつたらう。

酒を買ってきてくれ、と父は私に言った。それから、夕飯は妹と作つて勝手に食べ、今日は早く寝ろ、とも言った。

私には、父がこれからやろうとしていることが分かった。はじめてのことではない。前にも一度、経験がある。近所の子犬が大型犬に襲われて、うちに運ばれてきた時だ。傷の状態がひどくて、もう助かる見込みはなかった。父はやむなく子犬を安楽死させたのだが、その時も私に酒を買ってこさせた。普段は一滴も飲まない人であつたが、気の優しい父は、子犬を楽にしてやるために酒の力を借りる必要があつたのである。

つまり今回もそういうことなのだ。私は言われた通りに酒屋へ走り、一升瓶を買つて帰った。そしてその夜は何も食わず、頭から布団をかぶつて朝までふるえていた。

翌朝、父は二日酔いで起きてこなかった。ヒロの姿はどこにもなかった。

私は学校へ行つて、一部始終を仲間に話した。意外なことに、ゆうべ親から叱られたという者はひとりもいなかった。ネコババアは誰にも告げ口しなかったのだ。

その日は学校の帰りに、ネコババアの家近くまで行つてみた。しかし勇気がなくて、とちゅうで引き返して逃げてしまった。

この事件以来、ネコババアの姿を町で見ることがはなくなった。

「ヒロは腎臓がひどく悪くてね。どちらにしる、もう長いことはなかった」

後日、父は言った。なんだか自分に言い訳をしているような言い方だったが、私はとにかく、その父の見立てにすぎないと思ひだした。

それからしばらく経つた日曜日。朝、隣町の警察から父に電話がかかってきた。川からあがった遺体の身元を確認してほしい、という電話だった。父は慌てふためいて、車も使わず走つて飛び出していった。夕方に疲れ切つた顔をして帰ってきた父は、「西方さんが亡くなったよ」と私に告げた。

ネコババアは夜中のうちに酔つ払つて、橋から川に転落してしまつたらしい。死体はずつと下流の、ボートの係留所で見つかった。

ヒロが死んで以来、ネコババアは、昼間は自宅にひきこもり、夜は飲み屋を渡り歩いて酒浸りという生活を送っていたそうだ。代金をはらわなかったり、暴れて物を壊したりして、ずいぶん警察の世話になつていたらしい。そのたびに警官にむかつて、死にたい死にたいと嘆いていたという。遺書はなかったが、自殺と事故と、見方は半々だった。

身寄りが無い人だったので、父が遺体を引き取り、簡単な葬式を出してやった。その日以来、ダイちゃんとネズミの一件は、我々だけの暗い秘密となり、やがて記憶の底に封印されていった。ネコババアがまだ若いころ、ヒロシという一人息子を交通事故で亡くしていたと知ったのは、数年のちのことだ。道路で遊んでいる我々をガミガミ怒鳴っていたのは、そういう訳があったのかと知った時には、私は薄ヒゲをはやした中学生になっていた。その頃には、ネコババアの家はとっくに取り壊され、駐車場になっていた。

中学に入ったダイちゃんは、本格的に部活で野球に打ち込みはじめた。私たちとはますます疎遠になった。

ダイちゃんは、甲子園、六大学、そしてプロ野球を目指していた。正確にいうと、それを目指していたのはダイちゃんのお父さんだ。もっと正確に言うくと、ダイちゃんのお父さんのお父さんが、ダイちゃんのお父さんをプロ野球の選手にしたかった。勉強なんかどうでもいいから野球で一番になれ、と英才教育を仕込んだ結果、しかしダイちゃんのお父さんは甲子園にも行けず、印刷工になった。ダイちゃんは親子二代の夢をついだ三代目なのである。

ダイちゃんのお父さんは、優しい、というよりは極端に気の弱い人だったようだ。その点、私の父とよく似ていた。

私の父は北海道の酪農地帯に生まれ、苦学の末、はじめは獣医に、その後一から勉強しなおして人間の医者になった。こんな芸当ができるくらいだから、我が父ながらそうとう優秀な人だと思うのだが、医者をするには気持ちが悪すぎた。獣医をやめた理由は、せつかく命を助けた家畜が、最後は人間の都合で処分されてしまうことに耐えられなかったからだという。そこで人間の医師に転向し、大学病院に勤務した。ところがこっちは牛どころではなく、目の前で人が死んでいく。仲良くなった患者さんであれ、健気に病氣と闘っていた子供であれ、どんなに手をつくしても死んでいく人は死んでいく。そうして空いたベッドには、その日の午後にはもう新しい患者さんが入ってくる。

感情の量が多すぎて相手に同情しすぎる父には、勤まらない職業であった。それでも頑張っていたのは、妻、すなわち私の母が、肺を患って闘病していたからだ。母は、私が小学校にあがった年に亡くなった。それをきっかけに父は病院をやめ、母の故郷に小さな家を買って開業したのである。

貧しい人の多い地域だったし、父はお金のない人には持ち出しで治療をしてあげていたので、うちはいつも貧乏していた。そのことを不満に思ったことは一度もない。私も妹も、そんな父が子供心に誇らしかった。ただ、父は一回も私たち兄妹を叱ったことがなかった。これはよくなかったと思う。何をやっても親から叱られないと、子供としては心が通じているという実感をもちにくい。我々兄妹にとって父は、尊敬はできても、どこかつかみどころのない人だった。

ダイちゃんのお父さんは違った。彼は、内弁慶な人だった。周囲にはいつも折り目正しい謹直な人であったが、息子には厳しかった。とくに野球のことに関しては。

私は夜遅く、公園で泣きながら素振りをしているダイちゃんを何度も見た。休日のキャッチボールも、親子で遊んでいるなどといった微笑ましい風景ではなかった。ダイちゃんが一球投げるとき、投球フォームのどこそこが悪いと怒号が飛ぶ。しまいには手が出る。

ネコババアに水をかけられた時もそうだったが、ダイちゃんはよく瘤や痣をつくっていた。あれはぜんぶ、お父さんにブン殴られてできた傷だ。兄弟がいればまた違ったのかも知れないが、ダイちゃんは一人っ子だった。

ネコババアの死を、ダイちゃんはどう受け止めていたのだろうか。そんなことを考える暇もなく、練習にあけてくれたのだらうか。思えば、ダイちゃんが笑って野球をしているところを私は見たことがなかった。

私が六年生、ダイちゃんが中学三年生の年、私はダイちゃんに漫画を貸してあげることがあった。

その年の春、ダイちゃんのお父さんが怪我をして一ヶ月ほど入院した。このひと月という期間が、ダイちゃんにとっていわば初めての休息だったのだと思う。ある日、私が友達と川で釣りをしていると、堤防の上からぼんやりこっちを見ている少年がいた。よく見ると、ダイちゃんであった。

たまには野球以外のこともしてみたいであろう。私はダイちゃんに手招きをした。ダイちゃんはそれを待っていたかのように、恥ずかしそうに鼻をこすりながら、堤防を降りてきた。私は餌の付け方、竿の投げ方、リールの巻き方を手ほどきした。かつてボールの投げ方を教えてくれたダイちゃんに、今度は私が釣りを教えているのだ。私の教えたことをたどたどしく実践するダイちゃんは、無邪気な童そのものだった。

結局、ダイちゃんは一匹も釣ることはできなかったが、じゅうぶん楽しそうだった。ダイちゃんは笑っていた。私はそれが嬉しくて、何かもつとダイちゃんの知らない娯楽を教えてあげたくなった。それで、家に帰って漫画を貸してあげたのである。驚いたことにダイちゃんは、当時の少年なら誰もが知っているはずの流行漫画やテレビアニメについて、なにひとつ知らなかった。

私が差し出した漫画本を、大事そうに抱えて帰ったダイちゃんの背中を、今でも思い出すことができる。その本を、ダイちゃんはなかなか返してくれなかった。私も催促はしなかった。なんなら、あげたってかまわないと思っていた。野上君の模型のように。

しかし、漫画本は帰ってきた。返しにきたのは、退院したダイちゃんのお父さんだった。それも私にはなく、私の父に本を返しにきたのだ。もうこういうことはほしないでくれ、という一言が添えられていた。

ダイちゃんはまた、夜の公園で素振りをするようになった。

その夏、甲子園常連校の附属中学チームが、練習試合のためダイちゃんの学校にやってくることになった。私は初めて、ダイちゃんの試合を見に行った。

ダイちゃんにとっては大事な試合だ。彼は野球にすべてを賭け、学校の勉強は全くおろそかにしていたから、高校進学は野球による推薦が頼みの綱だった。この試合で活躍して実力を証明できれば、強豪校への推薦入学、うまくいけば特待生の席がねらえるかもしれない。この試合はダイちゃんにとって、高校受験そのものだったのだ。

ダイちゃんは、五回に外野の守備で登場し、二度飛んできたフライを二度とも落球した。どちらもタイムリーエラーになった。そして、その裏の攻撃でピンチヒッターを送られた。

日曜日の試合だったので、観客の中にはダイちゃんのお父さんの姿もあった。気の小さい人だから声をあげて応援することもせず、ぼつんと一人離れて、息子のエラーを呆然と

眺めていた。そしてダイちゃんが交替させられると、魂の抜けたような顔でグラウンドを去って行った。

その日以来、夜の素振りも、親子のキャッチボールも、ばったりと止んだ。

翌年、ダイちゃんは進学した。どこの高校へ入ったのかは知らないが、野球の推薦だったとは思えない。そこも、ひと月たらずで退学してしまったという。原因は、教師を殴って怪我をさせたためだと聞いた。

やがて、ダイちゃんのアパートの前に真っ黒なオートバイが出現した。

ダイちゃんは仲間を作らず、いつも独りだった。その爆音は毎夜やむことなく、町の安眠を妨げた。ダイちゃんのお父さんは、たびたび私の家にやってくるようになった。患者としての訪問だった。彼の顔には痣や瘤が絶えなくなっていた。腕や肋骨を骨折していることもあった。怪我の理由を、父はあえて尋ねなかったという。

治療を終え、ダイちゃんのお父さんを見送った父は、「お気の毒になあ」、とため息をついた。そして、「思えばダイちゃんも、かわいそうな子だな」と、つぶやくのだった。

私たち兄妹には、思春期はあったが反抗期はなかった。

どんなヘソの曲がった子供でも、あの父親には反抗できない。男手ひとつで二人の子供を養いながら、満足に休みもとらず、酒も飲まず、遊びもせず、一年中、貧しい人の病気を診ている。町の人たちは、まるで聖者のように父を敬っていた。たとえ私が人生の横道に逸れようとしても、近所の大人たちが私の襟首をつかんでまっとうな道にひきもどしたであろう。

グレはしなかったが、私は多少早熟だった。中学に進むと、家が貧しいということで、私は学校から新聞配達のアルバイトを許可された。朝夕配達して、バイト代は毎月数万円。私が担当する家計の割り当ては光熱費の支払いだったから、それさえすませてしまえば、残金はまるまる小遣いになる。中学生にとっては大金だ。私は仲間の中でもっともリッチな男になった。お金があれば気が大きくなる。私は調子に乗って、友人をさそって繁華会へ繰り出し、遊園地やボーリング場で豪遊した。

ある日、仲間をひきつれてゲームセンターで遊んでいると、夕子の悪い不良どもにからまれた。私は腕っ節はからつきしだったが、妙に意固地なところがあり、素直に金をくれてやれば許されたところを突っ張ったものだから、隣の空き地につれこまれ、あわや袋たたきという目に遭いあげた。

助けてくれたのは、ダイちゃんだった。

はじめはそれがダイちゃんだとはわからなかった。私の知るダイちゃんはいつも坊主頭であったが、その男は長い髪を赤く染め、うしろに撫でつけていた。全身は革ずくめで、袖からは入れ墨がのぞいていた。なによりも、しばらく見ないうちに体がものすごく大きくなっていった。

まったく偶然に通るかかったダイちゃんは、もみ合っている集団の中に私の姿を認めるど、オートバイを停めて、のしのしとこちらへ向かって歩いてきた。不良どもは動揺した。そういった連中の間では、ダイちゃんはすでに有名人だったらしい。彼らを怯えさせるような意味において。

ダイちゃんは一言もしゃべらず、ただ黙って不良どもを睨みつけた。たったそれだけで、

不良どもはすごすごと退散していった。

残された私は言葉もなく、ぼんやりと立ち尽くしていた。助けて貰ったことよりも、ひさしぶりに会ったダイちゃんの目つきの悪さに、ただただ衝撃を受けていた。

ダイちゃんは私の表情に気がつく、視線を避けるように顔をそむけ、そのまま何も言わずバイクに乗って去って行ってしまった。

これが、私がダイちゃんを見た最後だった。

父の患者に、赤島さんというおばあさんがいた。もう九十を過ぎた高齢で、六十才を越えた娘さんとアパート住まい。すっかり足腰が弱っているうえにひどいリウマチに苦しんでおり、ほとんど寝たきりの状態だった。

父は外来の診療時間が終わったあとに、毎日往診に行っていた。父が行けない時は、私が薬を届けに行った。そんな時、赤島さんは私の来訪を喜んで、いつもお小遣いをくれようとした。私は頑なに遠慮をして一回も受け取ったことはなかったが、赤島さんが亡くなったあと、父から「赤島さんはお前がお小遣いを貰ってくれないことを寂しがっていたよ」と聞かされた。

こういう時には遠慮してみせるのが大人の振る舞いだと思ったのだ。また、お駄賃欲しさで薬を届けているのではないと主張したい気持ちもあった。子供のつまらない見栄であった。素直に受け取って無邪気に喜んでみせれば、その方がよっぽど病床の赤島さんの慰めになったのに。背伸びをして、格好などつけるのではなかった。このことは今でも悔やまれてならない。

赤島さんは、オートバイの音が大嫌いだった。赤島さんのアパートの前は信号のない一直線の坂道で、ダイちゃんは一晩のうち何回もその道を行ったり来たりした。赤島さんは眠ることができず、しまいには神経症のようになってしまった。これには父もお手上げだった。蕎麦屋の出前のバイクが前の道を通っただけで、ぶるぶる体が震えるようになってしまったのだ。

赤島さんだけではない。近所には他にも病人がいる。赤ん坊をかかえた家もある。受験生もいる。ダイちゃんは、すっかり町の鼻つまみ者になってしまった。

ある晩、何者かが、堪忍袋の緒を切った。その者は坂道の端から端へ針金を渡し、ダイちゃんを待ち伏せした。

真夜中すぎ、少し離れた私の家まで、ものすごい音が聞こえた。操縦者を失ったバイクが、坂の下にある米屋の店先に突っ込む音だった。父は体調を崩して寝ていたため、私は妹と二人でパジャマのまま飛び立って、人だかりのしている方へ走っていった。街灯にぼんやり照らされた路面には、スイカをたたきつけたかのような血しぶきが広範囲に広がっていた。頭部を失って大の字に寝ている大男を見て、私はそれがダイちゃんであると直感した。彼はいつも、ヘルメットをかぶっていなかったのだ。

事件を悲しむ者は、ひとりとしていなかった。これでようやく静かに眠れると喜んでいゝる大人たちの声を、私はたくさん耳にした。針金を張ったのが誰なのかを追及する声は、ほとんど聞かれなかった。その後、犯人が見つかったという話も聞かない。もちろん警察は捜査をしたのだろうが、その結果には、誰も関心がないようだった。

ダイちゃんの両親は、人知れず町を去って行った。赤島さんも、間もなく亡くなった。

娘さんとのガス心中だった。知らせの届いた晩、父は子供たちの目もはばからず酔いつぶれた。このあたりが、父の医者としての限界だったようだ。

結局、父は開業医を辞めた。私が高校にあがるタイミングで一家は町を離れ、上京した。父は地域の医療センターで、健康診断の問診を担当する職についた。これなら人の死に目にあうこともない。

私は大学時代に遊びで書いてみたシナリオが懸賞に当り、現在の道に進んだ。

妹は女優をめざしたが、世に出る前に舞台監督の子供を身ごもって、今は専業主婦である。昔からしつかりした奴で、私の病氣のことを知っても、さして動揺はしなかった。あいつがいれば、父のことはまず心配あるまい。

ネコババアのこと、ダイちゃんのこと、この軟式ボールを見るまではすっかり忘れていた。そのまま忘れていたかった気もするのだが、このタイミングで思い出してしまふというのも、なにかの啓示なのだろうか。神仏は信じないなどと言っておきながら、私はしばし感慨にふけた。

「地獄に落ちる」と手紙を送りつける。我が子に野球を教える。道路で遊ぶ子供たちを怒鳴る。漫画を貸してあげる。お小遣いをくれる。それを遠慮する。

みんなみんな、よかれと思ってやったことだ。その時は、よかれと思ったのだ。いちど自分の手を離れた善意が、そのあとでどのような変遷をたどり、どのように決着するか。それを見通せる者などいない。そこまで見通したうえでの善行しか許されないというのであれば、誰も、人に親切になどできなくなってしまう。

私が漫画を貸したせいでダイちゃんがエラーをしたのかといえば、そんなことはあるまい。漫画を貸してあげた時、すくなくともダイちゃんは満面の笑顔だった。それがせいいつばいだ。それでよしとするしかないよ。私が遠慮をしたお小遣いだって、赤島家の大事な家計の一部だったはずである。そのお金は、別の何かの購入資金にあてられたはずだ。

これらの善意をもし閻魔様がマイナスに評価するのなら、私はいちおう異議申し立てはしてみようと思う。しかし、判決は受け入れられる。その時は、血の池地獄で得意の水泳でもします。ネコババアに追いかけられながら、野球をするのもいい。その時はまた、ダイちゃんがボールの投げ方を教えてくれるであろう。

父は八十を過ぎて健在である。毎日、見舞いに来る。私の病氣は父にとって、母を失って以来の家族の死となる。

モルヒネがきけると、私はベッドのうえで身をよじって激痛に耐える。その姿を、父は涙をたたえてじつと眺めている。私の方まで気が減入るのでやめてほしいのだが、出てくれないとも言えない。仕方が無いので、私は苦しみを押し殺して寝たふりをしている。すると父は私の枕元で、「かわいそうに」と繰り返す。

かわいそうに、か。  
意味はわかる。

父は、ヒコにもそう言った。ネコババアにも。ダイちゃんにも。赤島さんにも、そう言っていた。

ひよつとしたら、母にも。

ヒコを安楽死させる時、父は私に一升瓶を買ってこさせた。下戸の父が、一回で飲みき

れる量ではない。ネコババアの死を知らされた時、父はなぜ車を運転していかなかったのか。ダイちゃんが事故を起こした時、なぜ体調が優れぬと寝ていたのか。赤島さんが亡くなった時、妹の記憶では、父は知らせを受け前からすでに酔っていたそうだ。

私は父の勧めにしたがって、自宅療養の形で最期の時を過ごすと決めた。来週退院する運びである。父はもう酒を買ったかな。しかしまあ、それについては深く考えるまい。

あの軟式ボールが、最終的に私をこの心境まで導いた。ボールをくれたダイちゃんのお父さんも、思いもしなかった結末であろう。

\* \* \*

井上君へ

削除依頼です。先の方の原稿、書いているうちにうっかり筆が走ってしまった。ゲラチェックまでは、私の体もたない。最後の節はまるごとカットしてください。焼き捨ててください。くれぐれも、誰にも読ませないようにお願いします。